

有島武郎

# An Incident





# An Incident



彼はとうとう始末に困じて、ことう 傍かたわらに寝ている妻をゆり起した。妻は夢心地ゆめごこちに先程から子供のやんちゃとそれをなだめあぐんだ良人おっとの声とを意識していたが、夜着に彼の手を感じると、警鐘けいしょうを聞いた消防夫しょうぼうふの敏捷びんしょうさを以てもつ飛び起きた。然し意識がぼんやりして何をすることもなくそのまま暫くしばらじっとして坐っていた。

彼のいらいらした声は然し直ぐす妻を正気に返らした。妻は急にまぶた瞼の重味を取り除けられたのを感じながら、

立上って小さな寢床の側に行つた。布団から半分身を乗り出して、子供を寝かしつけて居た彼は、妻でなければ子供が承知しないのだと云うことを簡単に告げて、床の中にもぐり込んだ。冬の真夜中の寒さは両方の肩を氷のようにしていた。

妻がなだめたならばと云う期待は裏切られて、彼は失望せねばならなかつた。妻がやさしい声で、真夜中だからおとなしくして寝入るようにと云えば云うほど、子供は鼻にかかった甘ったれ声で駄々<sup>だ</sup>をこね<sup>だ</sup>だした。枕を裏返せとか、裏返した枕が冷たいとか、袖で涙をふいては

いけな<sup>い</sup>とか、夜着が重いけれど、取り除<sup>の</sup>けてはいけ  
ないとか、妻がする事、云う事の一つ一つにあまのじや  
くを云いつのるので、初めの間は成るべく逆<sup>さか</sup>らわぬよう  
にと、色々云いなだめていた妻も、我慢がし切れないと  
云う風に、寒さに身を慄<sup>ふる</sup>わしながら、一言二言叱<sup>しか</sup>って見  
たりした。それを聞くと子供はつけこむように殊更<sup>ことさら</sup>声を  
曇<sup>くも</sup>らしながら身悶<sup>みもだ</sup>えした。

彼は鼻の処<sup>ところ</sup>まで夜着に埋<sup>うづ</sup>まって、眼を大きく開いて  
薄ぼんやりと見える高い天<sup>てんじよう</sup>井を見守ったまま黙<sup>だま</sup>っていた。  
た。晩<sup>おそ</sup>くまで仕事をしてから床に這入ったので、重々し

い睡ねむげ気が頭の奥の方へ追い込められて、一つのとげとげした塊かたまり的となつて彼の気分を不愉快にした。

彼は物を云おうと思つたが面倒なので口には出さずに黙だまつていた。

十分。

十五分。

二十分。

何んの甲斐かいもない。子供は半睡はんすいの状態からだんだんと覚さめて来て、彼を不愉快にしているその同じ睡ねむげ気にさいなまれながら、自分を忘れたように疝かんを高めた。



斯<sup>こ</sup>うしては駄目だ、彼はそう思つて又むづくり起  
 き上つて、妻の傍にひきそつて子供に近づいて見た。子  
 供はそれを見ると、一種の嫉妬<sup>しつと</sup>でも感じたように氣狂い  
 じみた暴れ方<sup>あば</sup>をして彼の顔を手でかきむしりながら押し  
 退<sup>の</sup>けた。数え年の四つにしかならない子供の腕にも、こ  
 んな時には癩<sup>しやく</sup>にさわる程意地悪い力が籠<sup>こも</sup>っていた。

「ママちゃんの傍に来ちやいけない」

そう云つて子供は彼を睨<sup>にら</sup>めた。

彼は少し厳格<sup>げんかく</sup>に早く寝つくように云つて見たが、駄目  
 だと思つて又床に這入った。妻はその間黙<sup>だま</sup>つたまままで坐

って居た。而して是れほど苦心して寝かしつけようとして  
いるのに、その永い間、寒さの中に自分一人だけ起し  
て置いて、知らぬげに臥ねている彼を冷やかな心になつて  
考えながら、子供の仕打ちを胸の奥底では justify して  
いるらしく彼には考えられた。

彼は子供の方に背を向けて、そつちには耳を仮かさずに  
寝入ってしまったおうと身構えた。

子供の口小言くちこごとは然しかし耳からばかりでなく、喉のどからも、  
胸からも、沁しみ込こんで来るように思われた。彼は少しず  
ついらいらし出した。しまったと思つたけれども、もう

如何<sup>どう</sup>する事も出来ない。是<sup>こ</sup>れが彼の癖<sup>くせ</sup>である。普段<sup>ふだん</sup>滅多<sup>めつた</sup>に怒ることのない彼には、自分で怒りたいと思つた様々の場合を、胸の中の棚のような所に畳んで置いたが、どうかすると、それが下らない機会に乗じて一度に激発した。そうなるに彼は、彼自身を如何<sup>どう</sup>する事も出来なかつた。はらはらして居る中に、その場合々々に応じて、一番危険な、一番破壊的な、一番馬鹿らしい仕打ちを夢中でして退<sup>の</sup>けて、後<sup>ご</sup>になつてから本当に臍<sup>ほぞ</sup>を噛<sup>か</sup>みたいようなたまらない後悔<sup>こうかい</sup>に襲<sup>おそ</sup>われるのだ。

妻は、相かわらず煮え切らない小言<sup>こごと</sup>を、云うでもなし

云わぬでもなしと云う風で、その癖中々いつツごく、子供を相手にしていた。いらいらしている彼には、子供がいらいらしている訳が胸に徹こたえるようだった。あんなにいんねりむつつりと首はじめも尻尾しっぽもなく、小言を聞かされてはたまるものか、何んだってもつとはつきりしないんだ、と思うと彼の歯は自然ひとりに堅かたく噛み合った。彼はそう堅く歯を噛み合わして、瞼まぶたを堅く閉とじて、もう一遍いっぺん寝入ろうと努つとめて見た。塊かたまり的てきになつた睡気ねむけは然しかし後頭の隅すみに引っ込んで、眼の奥が冴さえて痛むだけだった。

「早く寝ないとママちゃんはやあなを穴に入れますか

らね」

始めは可<sup>か</sup>なり力の籠<sup>こも</sup>った言葉だと思つて聞いていると仕舞には平凡な調子になつてしまふ。子供はそんな言葉には頓<sup>とん</sup>着<sup>ちやく</sup>する様子もなく、人を焦<sup>いら</sup>立た<sup>だ</sup>せるように出来た泣き声を張り上げて、夜着を踏みにじりながら泣き続けた。彼はとうとうたまらなくなつて出来るだけ声の調子を穩<sup>おん</sup>当<sup>とう</sup>にした積りで、

「そんなに泣かせないだつて、もう少しやりようがある  
 そうなものだがな」

と云つた。がそれが可<sup>か</sup>なり自分の耳にもつけつけと聞

こえた。妻は彼の言葉で注意されても子供を取扱う態度を改める様子もなく、黙ったまままで、無益にも踏みはぐ夜着を子供に着せようとしてばかりいた。

「おい、どうかしないか」

彼の調子はますます尖<sup>とが</sup>って来た。彼はもう驀<sup>まつしぐら</sup>地に自分の癩<sup>かんしやく</sup>癩<sup>かんしやく</sup>に引き入れられて、胸の中で憤怒<sup>ふんぬ</sup>の情がぐんぐん生長して行くのが気持がよかった。彼は少し慄<sup>ふる</sup>えを帯びた声を張り上げて怒鳴<sup>どな</sup>り出した。

「光<sup>みつ</sup>！ まだ泣<sup>な</sup>いてるか——黙<sup>もく</sup>って寝なさい」

子供は気を吞<sup>の</sup>まれて一寸静かになつたが、直<sup>す</sup>ぐ低<sup>ひ</sup>い啜<sup>すす</sup>

り泣きから出直して、前にも増した大袈裟な泣き声になった。

「泣くとパパが本当に怒るよ」

まだ泣いている。

その瞬間しゅんかんかつと身体中の血が頭に衝つき上ったと思うと、彼は前後の弁わきまえもなく立上った。はっと驚く間もあらせず、妻の傍をすり抜けて、両手を子供の頭と膝ひざとの下にあてがうが早いから、小さい体を丸めるように抱きすくめた。不意の驚きに氣息いきを引いた子供が懸命けんめいになつて火のつくように「ママ……ママ……ママ……パパ……もうしま

せん……もうしないよう……」と泣き出した時には、彼はもう寢室の唐戸からどを足で蹴明けあけて廊下ろうかに出ている。冷たい板敷が彼の熱し切った足の裏にひやりと触ふれるのだけを彼は感じて快く思った。その外に彼は何事をも意識していなかった。張り切った残酷ざんこくな大きな力が、何等せいりよの省慮もなく、張り切った小さな力を抱かかえていた。彼はわななく手を暗の中に延ばしながら、階子段はしごだんの下にある外套掛がいとうかけの袋戸の把手ハンドルをさぐった。子供は腰から下が自由になつたので、思いきりばたばたと両脚りょうあしでもがいている。戸が開いた。子供はその音を聞くと狂気の如く彼の頸くびに



すがり付いた。然し無益だ。彼は蔓つるのようにからみ付く  
 その手足を没義道もぎどうにも他愛なく引き放して、いきなり外  
 套ぼうしと帽子はきものと履物と掃除道具とでごつちやになつた真暗な  
 中に子供を放り込んだ。その時の氣組なら彼は殺人罪で  
 も犯おかし得たであろう。感情の激昂げきこうから彼の胸は大波のよ  
 うに高低して、喉のどは笛のように鳴るかと思つて程燥かわき果て、  
 耳を聳返つんぽがえらすばかりな内部の噪音そうおんに阻はばまれて、子供の  
 声などは一語も聞こえはしなかつた。外套のすそか、箒ほうき  
 の柄えか、それとも子供のかよわい手か、戸をしめる時弱  
 い抵抗ていこうをしたのを、彼は見境みさかいもなく力まかせに押しつけ

て、把手ハンドルを廻し切った。

その時彼は満足まんぞくを感じた、跳り上りおどりたい程の満足まんぞくをその短い瞬間に於て思う存分に感じた。而そして始めて外界に對つて耳が開けた。

戸を隔へだてて子供の泣く声は憐あわれにも痛ましいものであった。彼と妻とに嘗なめるようにいつくしまれたこの子供は今まで真夜中にかかるめには一度も遇あつた事がなかつたのだ。

彼は何かなにかに酔よいしれた男のように、衣紋えもんもしだらなく、ひよろひよると跚よろけながら寢室しんしつに歸つて、疲れ果はてて自

分の寢床に臥し倒れた。そつと頭を動かして妻を見ると、次の子供の枕許まくらもとにしよんぼりとあちら向きになつて、頭の毛を乱みだしてうつ向いたまま坐っていた。

それを見ると彼の怒りは又乱潮らんちようのように寄せ返した。

「あなたは子供の育て方を何んだと思つてるんだ」

氣息いきがはずんで二の句がつけない。彼は芝居しばいで腹を切つた俳優せりふが科白せりふの間にやるように、深い呼吸しばらうを暫くの間苦しそうについていた。

「あまやかしていればそれですむんじゃないんだ——」  
彼は又氣息いきをついた。彼はまだ何か云う積りであつた

が総すべてが馬鹿らしいので、そのまま口をつぐんでしまつた。而そして深い呼吸をせわしく続けていた。

外套掛けからは命を搾しぼり出すような子供の詫わびる声が聞こえていた。彼はもう一度妻を見て、妻が先つきからその声に気を取られていると云う事に気がついた。苦にがい敵愾てきがいしん心が又胸につきあげて来た——嫉妬と云う言葉でも現わすべき敵愾心が——

「それだけでなくもパパは怖こわいものなんだよ、……それ……に」

パパだけが折檻せつかんをやつては、尚更怖なおよそこわがらせるばかりで、

仕舞にはどう始末しまつをしていいか判わからなくなる。男の兎うは七つ八つになれば、もう腕わんりよく力では母から独立どくりつする。女でも手がける事の出来る間に、しつかり母の強さも感じさせて置かなければ駄目なんだ。それは前から度々たびたび云つてる事ではないか。それを一時の愛あいちやく着ひに牽ひかされて姑息こそくにして置く法はない。是これだけの事を云う積りであつたのだけれども、迎とても云えないと気がついて黙もくってしまつたのだ。妻は寒い中に端坐たんざして身もふるわさずに子供の声に聞き入いつてゐるらしかつた。

「もう寝ろ」

彼は暫くたつてからこんな乱暴な云いようで妻を強いた。

「出してやらなくても宜よろしいでしうか」

彼の言葉には答えもせず、妻は平べったい調子で後ろを向いたままこう云っている。その落着きはら払ったような、ちつとも情味の籠こもらないような、冷静な妻の態度が却かえって怒りを募つらして、彼は妻の眼の前で子供をつるし切りにして見せてやりたい程荒すさんだ気分になった。憤怒ふんぬの小魔しょうまが、体の内からともなく外からともなく、彼の眼をはだけ、齒を噛み合わせ、喉をしめつけ、握った手に

油汗をにじみ出さした。彼は焰ほのおに包まれて、宙ちゆうに浮いて  
 いるような、目まぐるしい心の軽さを覚えて、総すべての  
 羈絆きはんを絶ち切って、何処どこまでも羽をのす事が出来るよう  
 にも思った。彼はその虚無的な気分気分に浸ひたりたいが為めに、  
 狂言をかいて憤怒の酒に酔いしれようと勉つとめるらしくも  
 あった。

兎とに角かく彼は心ゆく許ばかり激情の弄もてあそぶままに自分の心を  
 弄もばした。生全体の細かい強い震動しんどうが、大奏楽だいそうがくの Finale  
 の楽声のように、雄々しく狂おしく互たがいに打ち合って、  
 もう一步で回復かいふくの出来ない破滅はめつを招まねくかとも思われるそ

の境を、彼の心は痛ましくも泣き笑いをしながら小躍りして駈けまわっていた。

然しそうこうする中に癩癩の潮はその頂上を通り越して、やや引潮になって来た。どんな猛烈な事を頭に浮べて見ても、それには前ほどな充実した真実味が漂っていないなくなった。考えただけでも厭やな後悔の前兆が心の隅に頭を擡げ始めた。

「出したけりや出したら好いじゃないか」

この言葉を聞くと妻は釣り込まれて、立上ろうとした様子であったが、思い返したらしく又坐り直して始めて



彼の方を振りかえりながら、

「でも貴方あなたがお入れになって私が出してやったのでは、私がいい子にばかりなる訳ですから」

と答えた。それが彼には、彼を怖おそれて云った言葉とはどうしても聞こえないで、単に復讐ふくしゅう的な皮肉とのみ響ひびいた。

何が起るか解らないような沈黙が暫くの間二人の間に続いた。

その間彼は自分の呼吸が段々静まって行くのを、何んだか心淋こころさびしいような気持で注意した——インスピレ——

シヨンが離れ去って行くような——表面的な自己に還かえつて行くような——何物かの世界から何物でもない世界に這入って行くような——

呼吸が静まるのと正比例せいひれいして、子供の泣き声はひしひしと彼の胸に徹こたえだした。慈愛じあいの懐ふところから思いも寄らぬ孤独の境界に投げ出された子供は、力の限り戸を敲たたいて、女中の名や、家にはいない親しい人の名まで交かわる交かわる呼び立てながら、救いを求めていた。その訴えの声の中には、人の子の親の胸を劈つんざくような何物かが潜ひそんでいた。妻は始めから今までじつと我慢してこの声に鞭むちうたれて

いたのかと甫<sup>はじ</sup>めて気がついて見ると、彼には妻の仕打ちが如何<sup>いか</sup>にも正当な仕打ちに考えなされた。

それでも彼は動かなかつた。

火のつくように子供が地だんだ踏んで泣き叫ぶ間に、寢室では二人の間に又いまわしい沈黙が続いた。

彼はじつところえられるだけこらえて見た。然<sup>しか</sup>しこうなると彼の我慢はみじめな程弱いものであつた。一分ごとに彼の胸には重さが十倍百倍千倍と加わって行つて、五分も経<sup>た</sup>たない中に彼はおめおめと立ち上つた。而<sup>そ</sup>して子供を連れ出して来た。

彼は妻の前に子供をすゑて、

「さ、ママに悪う御座いましたとあやまりなさい」

と云い渡した。日頃ならばこうなると頑固がんこを云い張る質たちであるのに、この夜は余程懲こりたと見えて、子供は泣きじやくりをしながら、なよなよと頭を下げた。それを見ると突然彼の胸はぎゅつと引きしめられるようになつた。

冷え切った小さい寢床の中に子供を臥ねかして、彼は小聲で半ば嚇おどかすように半ば教えるように、是これからは決して夜中などにやんちゃを云うものでないと云い聞かせ

た。子供は今までの恐怖きょうふになおおびえているように、彼の云う事などは耳にも入れないで、上の空で彼の胸にすり寄った。

後ろを振り返って見ると、妻は横になつて居た。人に泣き顔を見せるのを嫌い、又よし泣くのを見せても声などを決して立てた事のない妻が、床の中でどうしているかは彼には略ほぼ想像が出来た。子供は泣き疲れに疲れ切つて、時々夢でおびえながら程もなく眠りに落ちて了しまつた。

彼は石ころのようにこちんとした体と心になつて自分の床に帰った。あたりは死に絶えたように静まり返つ

てしまった。寝がえりを打つのさえ憚はばかられるような静かさになった。

彼はそうしたままでもんじりともせずに思いふけた。

ひそみ切ってはいるが、妻が心の中で泣きながら口惜くやしがっているのが彼にはつきりと感ぜられた。

こうして稍ややと半時間も過ぎたと思う頃、かすかに妻の寝息が聞こえ始めた。妻の思いとちぐはぐになった彼の思いはこれでとうとう全くの孤独に取り残された。

妻と子供とを持った彼の生活も、ただ一つの眠りが

銘々をめいめいこんなにはばらばらに引き離してしまふ。彼は何処どこからともなく押し逼せまつて来る氷のような淋しさの為に存分にひしがれていた。水色の風呂敷で包んだ電球は部屋の中を陰鬱いんうつに照らしていた。彼は妻の寢息を聞くのがたまらないで、そつちに背を向けて、丸っこく身をかがめて耳もとまで夜着を被かぶつた。憤怒ふんぬの苦にがい後味あとあじが頭の奥でいつまでもいつまでも彼を虐しいたげようとした。

後悔こうかいしない心、それが欲しいのだ。色々と思いまわした末に茲まで来ると、彼はそこに生き甲斐のない自分を見出だした。敗亡はいぼうの苦にがい淋しさが、彼を石の枕でもして

いるように思わせた。彼の心は本当に石ころのように冷たく、冷<sup>ひ</sup>えこむ冬の夜寒の中にごちんとしていた。

(一九一四年四月、白樺所載)







日本文学電子図書館

---

小さき者へ

著 者：有島武郎

制作者：宮澤一郎

出版社：角川文庫、角川書店  
昭和43年7月30日 30版

---



日本文学電子図書館